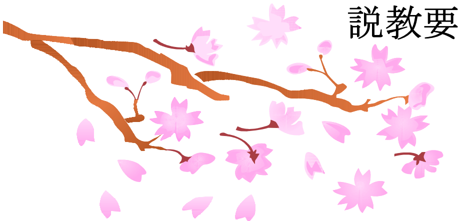

説教要旨「断ち切れないつながり」

ローマの信徒への手紙８章３１～３９節

以前、お世話になった宣教師の妻が亡くなられたとき、その宣教師は、笑顔で「死は残念なことではない。死は勝利だ。」とおっしゃられました。世の中の常識では“死は敗北”ですが、キリスト者にとって“死は勝利”です。しかしわたしたちは、“死は勝利”ということを、どれだけ真剣に受け止めることが出来ているのでしょうか。

「神がわたしたちの味方である。」パウロはそう力強く宣言をします。しかし、いくらそう声を張り上げても、目の前にある厳しい現実が無くなるわけではありません。わたしたちは往々にして、神が自分に利益を与えてくれるなら味方で、逆に自分に不利益を与えるなら敵であると判断します。そして、「神が本当にわたしを愛してくださっているのなら、こんなつらい思いをさせるはずがない。だからそんな愛の神は存在していないのだ。」などと嘯くのです。

「神が味方である」ことはキリストの十字架を根拠としない限り、理解できないことです。わたしたちがキリストの十字架へまなざしを向ける時、そこにはっきりと示された神の愛があります。パウロは言います。「その御子をさえ惜しまずに死に渡された方は、御子と一緒にすべてのものをわたしたちに賜らないはずがありましょうか。」（ロマ 8:32）。

神の子であるイエス様自らが、死の苦しみを味わわれました。そして父なる神は、死の力など取るに足らないことの証として、イエス様を復活させ、新しい命をお与えになったのです。そして復活されたイエス様は、わたしたちのことを父なる神に執り成して下さっているのです。イエス様による神の愛の中にいるわたしたちは、肉体の死を越えた彼方に、復活と永遠の命の希望を見つめ、それを待ち望むことができるはずなのです。

困難の中で、時として不条理とさえ思える苦しみの中で、迫害の中で、むしろ神の愛を疑うのが人間の自然な姿のようにも思えます。しかし、どのようなことが起ろうとも、イエス・キリストによって示された神の愛から、わたしたちを引き離すことはできないのです。

（２０２１・４・４　説教者：稲垣真実）